



巻頭言

今日の常識・明日の非常識： 新たなパイを創り出せ！

●
渡邊正義 Masayoshi WATANABE

横浜国立大学先端科学高等研究院 上席特別教授



今日の常識は、明日の非常識となる。この単純な真理は、今ほど重みを持ったことはない。政治や経済は混沌とし、科学技術はシンギュラリティーの足音を響かせている。変化はかつてない速度で進み、確固たる未来予想はもはや成り立たない。こうした時代にあって、特に科学技術に関わる若い方々にいかに生きてほしいかを、改めて考えてみた。議論の前提として、日本の特異な状況を直視しなければならない。「人口減少」と「少子高齢化」という二重の制約は、社会構造や経済活動に深い影を落としている。

筆者は、昭和、平成、令和と歩んできた。敗戦直後の苦難・疲弊・混乱はあったが、その後の30年は高度経済成長を遂げ世界の経済大国へと発展した。バブル崩壊以降の日本の低迷の遠因は、米ソ冷戦構造が崩壊し、その結果、経済のグローバル化が起こったこと、そしてIT革命が起こったことだろう。日本は、バブル崩壊後の不景気も手伝い、このような世界で起こったグローバル化、IT革命に乗り遅れたといわれている。それに人口減少、少子高齢化等が加わった複合効果が現状を生んでいるのであろう。この間の変化は、予想を絶するものだった。10年前でも現在を予想することは全くできなかった。

戦後の日本社会は、基本的に単一民族による単一路線人生だった。新卒一括採用、終身雇用、年功序列は単一路線人生を支えた。経済が右肩上がりパイが増えている中でのその争奪戦だったので、多くがパイの増加分を享受した。しかし、日本の現状は右肩上がり、パイの増大をなかなか許さない。縮小するパイを奪い合っても、誰かが得をすれば、誰かが損をする。この状況で求められるのは、既存のパイを分け合う発想ではなく、自ら新しいパイを創り出す生き方である。世界は急速に変化している。今日の常識は、明日の非常識になる可能性が極めて高い。日本の学生の典型的ロールモデルである、大学あるいは大学院（修士）を出て大企業に就職するという常識を見直す時期ではないか？

経済が右肩上がりであった高度成長期は、大学は基礎研究、企業は応用研究という役割分担があり、それなりに機能してきたと思う。しかし現在日本の多くの企業は、グローバル化の中で熾烈な国際競争に晒され、長期的視点からの研究開発に十分な余裕を持ち得ない。一方で今の日本を支える多くの企業は、戦後のスタートアップから成長した。若き研究者は博士課程で世界水準の知を磨き、場所を問わず革新を切り拓き、その成果を後進に継承してほしい。新事業を志す若者は、恐れず起業に挑み、未来の産業基盤を築いてほしい。単一路線の人生から複線へ、さらに複々線へと進むことが、第一歩となる。やがて見いだした独自の「幹線」を力強く歩めばよい。そのための制度や環境は、確実に整いつつある。人口減少と少子高齢化の制約を超え、新しいパイを創出することこそが、日本の未来を切り拓く道と思う。

© 2025 The Chemical Society of Japan